(4)1941 年 12 月８日

太平洋戦争の始まった日について、加藤は「ノートⅧ」に記し、のちに『羊の歌』に綴った。しかし、両者に書かれる内容はかなり異なっている。

「太平洋戦争」といわれる戦争が始まったという事実を知ったのは、12 月８日の朝、大学に着いたときのことである。「ノートⅧ」では友人から「とうとうはじまったね」と声を掛けられる。ところが『羊の歌』では、ひとりの学生が大学構内で号外を読みあげたとある。いずれにせよ、登校するまで加藤は開戦という事実を知らなかったことになる（写真：太平洋開戦を告げる『朝日新聞』〈1941 年 12 月９日〉）。

ハワイ・比島に赫々の大戦果

米海軍に致命的大鐵槌
戰艦六隻を轟沈大破す
航母一、大巡四をも撃破

畏し陸海將兵に勅語

戰艦ウエストヴアージニア撃沈

比島で敵機百を撃墜

米自慢の空の要塞撃滅

ホノ
陸続
ルソン
香港
泰
皇軍
泰政府

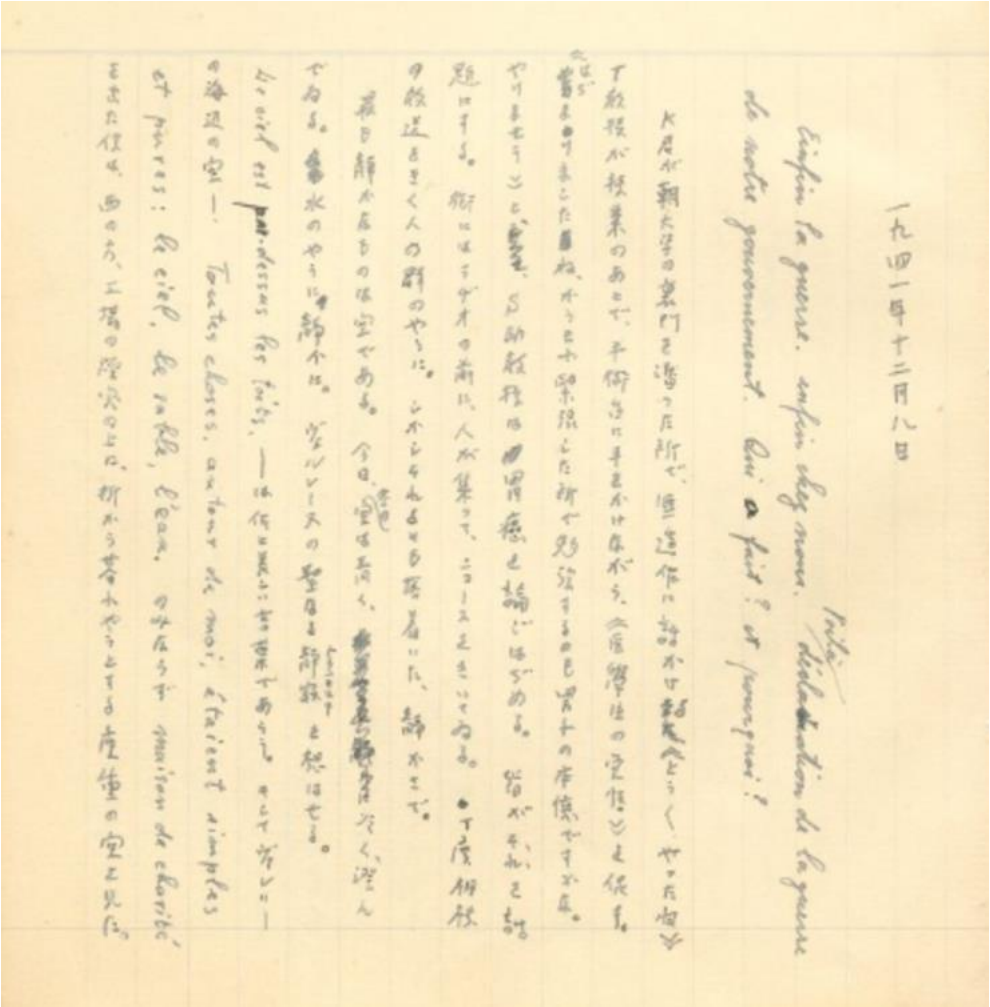
「ノートⅧ」では、授業に出ると教授たちは「医学生の覚悟」を促し、「男子の本懐」を説いたとある。しかし、加藤はヴェルレーヌを思い、歌川広重の絵を思い出しつつ、「弾丸や飢えは僕を変へるであらう。勇気の要るのもその時であらう。それまでは如何なるニュースも僕を変へることは決してない。僕は今も晴れた冬の空を、美しい女の足を、又すべ

て僕の中に想出をよびさますあの甘美な旋律を愛する。présence とは豊かなものだ」と綴った。

太平洋戦争開戦の日に、「弾丸や飢えが僕を変へるであらう」と恐れた日本人はどれほどいただろうか。同時に、冬の空の澄んだ青さと、女の脚の美しさと、ショパンの音楽の美しさに思いをいたした人もきわめて稀だったろう。

一方『羊の歌』「ある晴れた日に」には次のように書かれる。「附属病院のなかの階段教室へ入り、診断学の講義――でそれはあったろう――が、いつものようにはじまって、いつものように終るのを、茫然と見まもっていた。講義の内容は耳に入らず、ただ落着きはらった教授が今朝の号外のことを知っているのだろうか、それともまだ知らないので、何事もおこらなかったように平然としているのだろうか、と考え続けていた」。

この違いは何だろうか。「ノートⅧ」に記したのは、おそらく開戦、その日のことに違いない。『羊の歌』に綴ったのは、開戦から4半世紀後のことである。それでも12月8日のことを間違って記憶したとは考えにくい。「医学生の覚悟」をいい、「男子の本懐」だといった教授もいれば、何事もなかったように講義を進めた教授もいたということなのだろうか。

いずれにせよ、開戦の事実によって加藤自身が鼓舞されることはなく、暗澹たる思いに沈んでいたことは間違いない。自宅に戻ると母織子から「どうなるのだろうか」と問われ、「勝ち目はないですね」「他に考えようがないですよ」と苛立ちながら、吐き捨てるように答えている（『羊の歌』「ある晴れた日に」）。

「その頃の私はいくさが近づきつつあることを知らなくはなかったが、英米両国を相手にしてのいくさがほんとうにおこるだろうとは信じていなかった」（同上）と綴る。これは加藤家と親しくしていた大叔父岩村清一の考えでもあった。海軍リベラル派の岩村は、米国一国を相手とする戦いならば、まだ作戦の立てようはあるが、英米両国相手の戦いでは、作戦の立てようがない、と語るのを加藤は聞いていた（写真：『青春ノートⅧ』「1941 年 12 月８日」の項）。